



Title	カント「神の現存在の証明の不可能性について」の考察：『純粹理性批判』「超越論的弁証論」より
Author(s)	佐藤, 敦
Citation	哲学倫理学研究, 6: 51-62
Issue Date	2004-02
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/9513
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

カント「神の現存在の証明の不可能性について」の考察

—『純粹理性批判』「超越論的弁証論」より—

佐藤 敦

カントは「超越論的弁証論」の中で、神の現存在の証明の不可能性について、つまり人間の認識能力の限界について述べた。その場所に着眼し、その認識が不可能であることの考察過程を解明していく。

まず、どうして神が現存することが証明される必要があったのか、その必要とされる根拠を解明する。そして、神の現存が証明可能と思われてきたその証明方法の誤りを考察する。最後に、それら証明方法が誤りだと解明され、それでも神の現存在が確信される可能性があることについて述べる。

1 神の現存在の問題

まず、どうして神が現存するということの証明が必要であったのかという問題である。その理由は、二つ挙げられる。

一つは、私たちの認識における概念の正当性のためである。

私たちの認識は私たちの概念と対象との一致によって可能となる。認識の概念は、総体的可能性という理念が前提され、そこから諸物を規定する述語としてもってこられる。認識の際の概念は、それに対応する或る対象が与えられている。これが認識における概念が正当である理由である。このときに、認識を成立せしめる理念にも、或る対象が与えられていなければならないと考えられ、その理念は実体化され、すべての事象性をもっている最も事象的な存在者となる。この者が根源的存在者としての神である。しかし、この存在者が現存すると述べることは不可能である。その理由は、この理念に対応する対象が、認識における概念に対応する対象のように、客観として見出すことは不可能であるからである。

以上に述べた神はたんなる仮象である。しかし、カントがその現存在の不可能性を解明すべきとした神とそれは一緒ではない。したがって、神の現存在の証明の必要性のための、もう一つの理由を次に述べる。

その理由は、現存することの原因の必要性のためである。

何らかの或る物が現存する以上、その現存することの原因があり、その現存のさらなる原因の追求がなされる。このとき、最高の原因を確定しようとするならば、その存在者は絶対的に必然的な存在者と名づけられる。

しかし、現存することの最高の原因をその遡行により見出したただけならば、その存在者が神であると述べることはできない。この絶対的に必然的な存在者が、根源的存在者であるために、その存在者が如何なるものかという問いを満足せしめる根拠が必要となる。絶対的に必然的な存在者が他の原因から見出されたものではない存在者であるためには、その現存に対する原因をおのれのうちに持っている存在者でなければならない。つまり、この者はすべての事象性を有している、最も事象的な存在者にほかならないのである。最も事象的な存在者でもあり、絶対的に必然的な存在者でもある存在者が、カントが批判の対象とした神なのである。

カントは、神が以上のようなものであるとし、その神の現存在の証明方法は三つあり、それ以外にないとする。

2 神の現存在の証明の不可能性について

ここからは、それぞれの証明がどのような理由によって不可能であるか、そして、この三つの証明の関係性が如何なるものであるかを、解明していく。

まずは、存在論的証明の不可能性についてである。

存在論的証明とは、「すべての経験を捨象し、たんなる概念にもとづいてまったくア・プリオリに或る最高の原因の現存在を推論する」[A590/B629-A591/B630] 証明である。

この証明は、絶対的に必然的な存在者の現存在を無視することはできないという要求 (I) と、そして、概念同士の必然的結合が正当性をもっている実例があること (II) を、論拠に成立する。

概念同士の必然的な結合が可能である「実例」は幾何学的命題である。つまり、

「三角形は三つの角を持つ」ということが、必然的であることから、「神は現存する」ということも必然的であるとするのである。

「三角形」と「三つの角をもつ」との必然性（A）が、「神」と「現存する」との必然性（B）と同等であるならば、存在論的証明は神の現存を証明することができる。しかし、（A）と（B）は、異なるものである。

（A）は、論理的必然性である。「三角形」と「三つの角をもつ」が必然的であると述べることができるのは、「三角形」の概念が「三つの角をもつ」ということと不可分だからである。しかし、この必然性が（B）の実例であると述べることはできない。幾何学的命題が（B）の実例であるとするならば、事象の絶対的必然性とならなければならない。事象とは、その概念の実質の存在である。つまり、事象の絶対的必然性は、幾何学的命題の論理的必然性の実質もふまえた必然性なのである。この必然性において適切に表現するならば「三角形が現に存在している（与えられている）という条件のもとでは、三つの角（その三角形における）も必然的な仕方でも現に存在している」[A593/B621]となる。

（A）と（B）が論理的必然性のみであるなら、神の現存在はたんなる概念における証明である。（A）と（B）が、事象の絶対的必然性であるとするときには、（A）は保証されるが（B）は保証されないという矛盾を引き起こす。（B）を事象の絶対的必然性として適切に表現した場合、「神が現に存在しているという条件のもとでは、現存在（その神における）も必然的な仕方でも現に存在している」となる。

（A）が（B）の実例であると思われたのは、以下の錯覚による。それは、「或る物について、ア・プリオリな概念がつけられ、その概念が一般の見解にしたがえば、その外延のうちには現存在も包括されている」[A594/B622]という錯覚である。つまり、私たちは、三角形の概念を思い浮かべたとき、きわめて自然的に、現存するということがその三角形を規定する要素として含まれていると考えるのである。

このような錯覚が誤りである理由は、現存在を同一律により証明することが可能であるかを考えることで容易となる。（A）を支える根拠は、同一律の確実性である。同一律とは、いかなる主語もそれと同一であるような述語が属するという法則である。この法則において矛盾が生じるときは、「或る三角形を定立し、し

かもこの三角形の三つの角を無効にする」[A594/B622] ときである。したがって、(A) が矛盾を犯していないときとは、「三角形」と「三つの角をもつ」とが必然的である場合と、三角形を定立しない場合である。つまり、三角形が存在しない場合、「三つの角を持つ」ということを無効にしても何ら矛盾は生じえないのである。

(B) は、同一律の確実性を根拠に述べることはできない。神についての同一判断は「神は全能である」という判断である。もし、(B) が同一律によって証明することが可能ならば、「神」と「全能である」とが必然的であると述べることは可能である。しかし、三角形のときと同様、「全能である」ということを無効にしようとしても、神と現存在が必然的であるため、無効にすることができなくなってしまう。

幾何学的命題の実例は、「神」と「現存する」との必然性に何ら関係するものではない。(A) に「現存する」ということは何ら関係するものではない。「現存する」ということが、「全能である」とか「三つの角をもつ」という事象性として扱うことができないのであり、そのように用いるのは、私たちの自然的錯覚によるのである。

同一律において、その現存在が証明されえない。つまり、「概念同士の必然的結合の正当性」(II) が現存在を証明するのには役立たないことが解明された。次に、「絶対的に必然的な存在者の現存在を無視することはできないという要求」(I) という論拠を考察する。

絶対的に必然的な存在者が、絶対的に必然的な存在者としてあるためには、すべての事象性をもつ最も事象的な存在者でなければならない。現存する物の最高の原因として、現存在を一つの事象性として手持ちにしていることから、この存在者は現存することができる。

しかし、この現存在を一つの事象性として持つ最も事象的な存在者が現存すると述べるならば矛盾が生じる。その理由は、主語概念を分析すれば述語概念がおのずと導きだされる分析的命題において、現存在を証明することは不可能だからである。この場合の最も事象的な存在者の現存在を証明するためには、分析的命題でなければならないのである。しかし、「或る物が現存する」ということが分析的命題であるときは、その或る物の現存在をその可能性に属するものとして前提

し、その現存在を内的可能性に基づいて推論したにすぎないのである。したがって、或る物が現存しない可能性もある以上、「現存する或る物は現存しない」という矛盾をひきおこしてしまう。

カントが述べる「現存する」ということは、「主語自体そのものをあらわすその述語とともに、しかも私の概念に連関づけられた対象を定立する」[A599/B627] ことである。

このことを解明するため、つまり、「現存する」が事象性に含まれないことを示すため、「現実の百ターレルと可能的な百ターレル」という例を挙げる。

「百ターレルがある」という思惟の際の百ターレルと、現実の百ターレルは同様な内容をもつ。しかし、「現存する」が事象性に含まれるものとして考えられるならば、私の思惟する百ターレルにもう一つの事象性が、たとえば一ターレルを加えたものが、つまり、現実の百ターレルと、可能的な百ターレルとが等しいことになる。

「概念と対象、これら両者は精確に同一のものを含んでいなければならない」[A599/B627]。もし、事象性の中に「現存する」が含まれるならば、私が思惟するものは私が思惟するという理由により現存しえなくなり、また現存するものは現存するという理由により私に思惟されることが不可能となる。

(I) と (II) の誤った論拠が存在論的証明を維持させてきたのであり、その誤りの解明が為された以上、この証明で神の現存在を証明することは不可能である。

※

次に宇宙論的証明の不可能性についてである。

宇宙論的証明は、「或るものが現存するなら、それゆえ、或る断じて必然的な存在者も現存しなければならない。ところで、少なくとも私自身は現存する。それゆえ、或る絶対的に必然的な存在者は現存する」[A604/B632] という推論による証明である。

この証明は、二つの根拠をよりどころとしている。一つは、純粹理性における原因結果の因果律の正当性 (I) であり、もう一つは「現存する」ということの経験的確認 (II) である。

しかし、神の現存在を証明するのに、両方の根拠は十分であると述べることはできない。

(I) の論拠は、原因結果の因果律の推論を感性界の外にまで拡張して用いる誤りを犯している。因果律は現象界に限って使用されるものである。もし、この法則が感性界を超えた使用でも正当であると述べる場合に、その最高の原因としてある存在者はどのような存在者であるか述べなくてはならない。この証明で見いだされる存在者は、「対立しあうあらゆる可能的な述語に関してそれらのうちの一つによってのみ規定される」[A605/B633] 存在者であり、つまり、最も事象的な存在者にほかならない。

まず、宇宙論的証明は絶対的に必然的な存在者の現存在の推論を行う。次に、その存在者の無条件的必然性から無限の事象性を推論している。つまり、この推論は、存在論的証明と何ら変わるものではない。

宇宙論的証明は、存在論的証明よりも自然的である。しかし、(I) の論拠が存在論的証明にゆきつく以上、宇宙論的証明は失敗に終わる。

次に、宇宙論的証明が自然的であり、存在論的証明と異なるように思わせる (II) の論拠を解明する。

「私たちが現存する」ということは、疑いのない事実である。しかし、このことが宇宙論的証明において使用されているのは、必然的な存在者の現存在に向かつての一步を踏み出すためだけである。したがって、必然的な存在者が如何なるものか尋ねられるならば、(II) の論拠は何ら役立つものではなく、(I) の論拠にゆきつく。

(I) と (II) の論拠は、神の現存在を証明するには十分ではない。このことは論理的な様式を用いることで証明される。

宇宙論的証明の主要根拠は「あらゆる端的に必然的な存在者は最も事象的な存在者である」というものである。この命題を真なるものとするならば、すべての肯定判断と同様、少なくとも限量换位される。

限量换位された判断は、「いくらかの最も事象的な存在者は端的に必然的な存在者である」というものである。しかし、最も事象的な存在者は如何なる点においても区別されることはなく、いくらかの最も事象的な存在者に妥当するものは、すべての最も事象的な存在者にも妥当する。つまり、「あらゆる最も事象的な存在者は、端的に必然的な存在者である」という単純换位が成立する。

もし、宇宙論的証明は「最も事象的な存在者は絶対的に必然的な存在者である」

ということを受け入れないとするならば、「論点相違の虚偽」[A609/B637]を犯している。

以上のような単純換位が成立することから、最も事象的な存在者が絶対的に必然的な存在者であるという存在論的証明が証明しようとしていたことを、宇宙論的証明は根底に置いていると述べることができる。

(I) と (II) の論拠は宇宙論的証明における神の現存在の証明を維持させるのに十分ではなく、宇宙論的証明は存在論的証明にゆきつく。宇宙論的証明が存在論的証明の論拠に頼らざるをえない以上、この証明は不可能なのである。

※

最後に物理神学的証明の不可能性についてである。

物理神学的証明は、或る一定の経験によって、つまり現実世界における自然の秩序や合目的性の存在の原因として、神の現存在を推論する証明である。

物理神学的証明の根拠は、自然における秩序の存在である。

この秩序の存在理由を私たちは答えることができない。したがって、この秩序の存在理由に答えることができるものを、その秩序を創りだしたとされる存在者に求め、その根源的存在者を神であるとするのである。

自然の秩序の存在は否定されることはない。しかし、私たちはその秩序をどのように知りえたのかというと、人間的技術が生み出した規則性との類比によってである。この規則性では、「形式の偶然性」[A626/B654]しか証明されない。人間的技術が生み出した規則性の実質は現象界の対象に見出すことが可能である。しかし、自然の秩序を成り立たしめる実質部分の説明をこの証明は行っていない。したがって、物理神学的証明における最高の存在者は、たんなる「世界建築者」[A627/B655]なのである。

物理神学的証明は「世界建築者」を最高の原因として見出す。物理神学的証明が実質の偶然性という問題を解決する本来神と呼べる最高の原因たる「世界創造者」[A627/B655]の現存在を証明するためには、最も事象的な存在者を証明できるとする存在論的証明に頼らざるをえなくなる。

物理神学的証明は、自然の秩序の存在を現実世界から見出し、その最高の原因を推論する。その際、経験世界を飛び越え、そこで見出される超越論的理念に、つまり、存在論的証明にゆきつくのである。

※

以上に述べた三つの証明は、すべて存在論的証明が根底に置かれている。しかし、存在論的証明だけの批判では、私たちの現存在の原因に対しての解答がなされていない。宇宙論的証明においてその神の現存在の証明が不可能であると解明されることで、その解答をえることができる。物理神学的証明は、私たちの現象界の認識対象である世界の構造の不可思議に対しての解決のため、神の現存在が要求されたが、それは世界建築者でしかなく、創造主たる神であるためには、存在論的証明を論拠にしなければならないのである。

「人がいかなる経験においても {[それに]} 達しえない対象、あるいは対象についてのそうした概念にかかわる」[A634/B662] 際の理性の働きは思弁的である。その不可能性が問われたこれら三つの証明は、カントが理性の思弁的原理にもとづく神学と称するものである。カントは、それら三つの関係性を論じ、「神の現存在の証明が不可能である」ことの、つまり、思弁的神学が不可能であることの解明を全うしたのである。

3 神の現存在の要請

最後に、すべての思弁的神学の証明が不可能であるということが解明され、唯一の神を確信する方法が残されていることについて論ずる。ここで、カントが思弁的神学における証明が不可能であると論じた真なる理由が見出されるのである。

唯一、神を確信することのできる方法とは、道徳的諸法則が根底に置かれ、あるいはそれを手引きとして使用される場合である。

カントは、神を本来の究極的理想とする。理念と対応させることで、理想の内容は理解される。

理念の一つとして「まったく完全性における人間性」[A568/B596] という例をあげる。人間性とは、「この本性に属するすべての本質的な諸固有性、すなわち、この本性について私たちの概念を構成する諸固有性」[A568/B596] のことを指す。つまり、人間性とは人間に含まれるべき性質であり、その性質とは、私たちがこの本性に相応しいものとして作りだした概念に当てはまるべきものである。

まったく完全性における人間性は、その人間性の諸固有性が目的と完全に合致するに至るまでの道標を与えてくれるものである。たとえば、「約束を守る」ということを人間性に相応しいものであると述べることができる。しかし、そう思っているだけでは、この人間性は空虚なものとなる。この人間性が空虚なものとならないためには、約束を守るということを実践し、さらに実践しつづけることが必要である。つまり、或る物を認識する際、実質部分を現象界に見出したのと同様に、この人間性の実質部分も、現実世界の中で実践するということが満たさなければならない。そうすることによって、その人間性は完全なる人間性に合致することができる。

さらに、まったく完全性における人間性は、「この理念をあまねく規定するのに必要なすべてのものを含んでいる」[A568/B596]。つまり、人間を規定する諸固有性をすべて含んでいる完全なる人間が前提され、彼から諸固有性を持ち出すことで、人間を規定することができる。人間を規定するすべてのものをまったく完全性における人間性は手持ちにしているのである。私たちは、このように人間をあまねく規定する完全なる概念をもちえた人間像を現実のものとして実体化したものを理想と名づけることができる。

しかし、このような理想は「神的悟性の理念」[A568/B596]である。これは、プラトンの考えた理想である。神的悟性の理念とは、思惟したこと＝直観するものという、つまり、創造主たる神が見たものは、すべて彼が思惟したものであり、そうした対象は完全なものであるとする、人間のあらゆる能力を超えた力によってつくられたものである。私たちは直観によって或る表象を受け取ることで対象を対象たらしめることが可能である。しかし、私たちは、思惟したこと＝直観したものとして対象を実体化することは不可能である。

本来、理想としてあるべき究極の存在者は、神その人である。私たちは、その者を実体化することによって、つまり、人間的理性を神的悟性のように扱うことで、彼を見出すことが可能となるのである。しかし、私たちに神的悟性を与えられていたとしても、私たちが神をさらに創りだすことは不可能である。究極の理想は、すべての原因としてすべての事象の原型としての存在者である。それは、私たちの能力でどうこうできるものではなく、ただ完全なる神として存在しているのである。私たちは絶えず彼から善を知ることができ、そうして私たちは善を

なすことが正当であると述べることができるのである。さらに、私たちがすべてのものを規定する際に彼からその諸固有性を導き出している。このような可能性がある以上、私たちはそれが単なる神的悟性の理想であるといって無に帰せしめることはない。彼を人間にとっての理想として何らかの使命と意図をもって、つまり本来の究極の理想である神を人間的理性にかなった理想として使用することができるのである。

その使用とは、「実践的な力（統制的原理としての）」[A569/B597]として扱うことによって可能となる。或る種の行為、たとえば、先に述べたような「約束を守る」という行為を行おうとするときに、その根底にひそんでいる「約束を守らなくてはならない」ということの原因力となるべきものが理想に含まれている。人間的理想の存在理由は、まさにここにある。この理想は道徳的諸命題にとっての「一つの不可欠の標準」[A570/B598]を与えてくれるのである。

本来の人間的理想の意義は、以上のようなものである。私たちが理想の現存在を確信することができるのは、すべての行為の原因力となる統制的原理としてその存在者を要請することによって可能となるのである。つまり、神は実践的使用の際には疑いもなく確実性を持った存在者という理想として存在することが可能となるのである。

しかし、ここで問題が生ずる。神は、あらゆる完全性をもっていることは事実であり、それは全能であるとか、円満具足であるとかさまざまな尊称を与えられるに相応しい存在者である。だからこそ、神は、あまねく道徳的諸命題を支え、私たちの行為に原因力を与えてくれる原型として存在することができる。それでは、道徳的諸命題を私たちはどのように神から与えられるものとして受け取ることが可能なのであろうか？ それは、すべての道徳的諸命題を神が有しているということから、つまりすべての事象を完全に有している存在者から与えられるということによって可能となる。つまり、本来的理想の神が最も事象的な存在者と何ら変わるものではないことが証明される。存在論的証明における神の現存在の証明が不可能であることが解明された以上、最も事象的な存在者は仮象である。しかし、本来的理想である神は最も事象的な存在者であることの可能性が残されているということを誰も否定することはできない。

この問題に対する答えに、思弁的神学が不可能であると論じた真なる理由が隠

されている。

カントは思弁的原理にもとづくすべての神学を批判する。しかし、カントが批判すべきものとしたのは、その証明様式なのである。私たちは、それぞれの神の現存在の証明が不可能であるということを、明敏な批判によって解明できると同時に、その存在そのものに関しては、何ら洞察しえないのである。

次のような洞察の必要性が問題として掲げられる場合、私たちは神の現存在の証明に対して行き詰まったのと同様に、この洞察に対しても行き詰まりを感じてしまう。つまり、「すべてのものの根源的根拠として最高の存在者というものは存在しない」[A641/B669] ということの洞察の不可能性である。私たちは、すべてのものの根源的根拠としての最高の存在者の現存在の証明が不可能であることを解明することが可能である。しかし、最高の存在者が存在しないということ^を述べたのではない。つまり、最高の存在者である神というものの現存在の証明の不可能性については論じられた。しかし、神というものは「一つのたんなる理想、しかし完全無欠な理想」[A641/B669] のまま、その存在そのものに関しては論じられることはない。「この概念の客観的実在性はこのような方途によってはなるほど証明されえないが、しかしまた論駁されうることもない」[A641/B669] のである。

カントが思弁的神学においてその不可能性を論じたのは、私たちの認識能力には限界があり、その限界を私たち自らが確立しなければならないということを念頭においていたからである。そして、道徳と私たちの自然認識との区別を設けるのである。

理性の思弁的使用における神の現存在の証明は不可能である。しかし、実践的使用における神の必要性により、道徳的神学は神の現存在を述べるのが唯一可能であるものとして残されるのである。しかし、カントは、『純粹理性批判』においてはそれ以上の言明を避け、『実践理性批判』にその可能性の詳細な考察を委ねるのである。

注記

テキストとして、『純粹理性批判 上』『純粹理性批判 中』『純粹理性批判 下・プロレゴメナ』を用いた。括弧の後にページ数が書かれてあるものは、すべてこのテキストからの引用である。

テキスト

原 佑訳 『純粹理性批判 上』『純粹理性批判 中』『純粹理性批判 下・プロレゴメナ』、理想社、1981